Twinkle 東京女子医科大学学術リポジトリ
Tokyo Women's Medical University - Information & Knowledge Database
https://twinkle.repo.nii.ac.jp

15歳以下の孤立性僧帽弁疾患における僧帽弁手術の遠隔期成績

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-02-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 久米, 悠太 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.20780/00032085

主 論 文 の 要 約

15歳以下の孤立性僧帽弁疾患における僧帽弁手術の遠隔期成績

東京女子医科大学心臓血管外科学教室
（指導：山崎健二教授）㊞
久米　悠太

日本心臓血管外科学会雑誌　第45巻　第4号　154頁～160頁（平成28年7月15日発行）に掲載

【目　的】

小児期の人工弁置換術には術後の脳関連合併症や血栓弁、成長に伴うサイズミスマッチなどの懸念があり可及的に弁形成術を行うことが望ましいが、やむを得ず弁置換術となる症例が存在する。15歳以下の孤立性僧帽弁疾患に対する僧帽弁形成術、機械弁置換術の遠隔成績を検討した。

【対象および方法】

1981年1月から2010年12月までに当院で僧帽弁形成術を行った30例(P群:男児21例、平均年齢4.6±4.6歳、平均体重13.4±8.9kg)、及び機械弁による僧帽弁置換術を行った26例(R群：男児9例、6.2±4.6歳、平均体重16.4±11.2kg)の計56例を対象とした。平均追跡期間9.3±7.8年、最長27.7年であった。

【結　果】

P群、R群共に周術期死亡例はなく、遠隔期にR群で4例を失った。再手術はP群で6例、R群で5例に認めた。P群における再手術6例のうち、残存僧帽弁閉鎖不全症に対して僧帽弁置換術を施行したのが5例、術後に相対的僧帽弁狭窄症となり僧帽弁置換術を要したものが1例であった。R群における再手術5例のうち、サイズアップを要したのが3例、人工弁機能不全と血栓弁が1例ずつであった。脳関連合併症は両群とも遠隔期に1例ずつ認めた

のみで、人工弁感染は認めなかった。10 年時での生存率は P 群 100.0%、R 群 88.0%であり有意差が見られた。10 年時での再手術回避率は P 群 77.6%、R 群 77.0%、10 年時における脳関連合併症回避率は共に 100%であり有意差は見られなかった。

【考　察】

小児における僧帽弁疾患に対する外科的加療に関しては、周術期死亡率の高さ、人工弁置換術後の成長に伴う再弁置換術の必要性、機械弁置換術後の抗凝固療法維持の困難さなどから、可能な限り僧帽弁形成術を行うのが良いとされている。成人における僧帽弁形成術は長期成績も良好な手技として確立しつつあるが、先天性僧帽弁疾患はその形態異常も多岐にわたるため定型的な症例は少なく、僧帽弁形成術においては複数手技が必要とされる困難な手術と言える。当科における僧帽弁形成術の成績は、術後早期に僧帽弁置換を余儀なくされる症例が存在するものの、その高い生存率と低い脳関連合併症率から、遠隔成績はおおむね良好であると言える。また、遠隔期の再手術回避率には懸念が残るものの若年期における僧帽弁置換術の成績としては、懸念されていた機械弁による脳関連合併症の発生も少なく許容されるものと考えられた。

【結　論】

孤立性僧帽弁閉鎖不全症に対する僧帽弁形成術、僧帽弁置換術の遠隔成績は良好であると言える。孤立性僧帽弁狭窄症においては生存率に懸念が残るものの僧帽弁形成術、僧帽弁置換術両群の 10 年時における再手術回避率には有意差を認めなかった。懸念されていた機械弁置換術後の脳関連合併症に関しても 10 年時では僧帽弁形成術と有意差なく良好であった。